

SEMINAR

「M.E.E.T.ザ・ワールド」プログラム in Japan

～国際理解教育を地域で推進していくための担い手育成

トレーニング・セミナー&ファシリテーション実践



参加型の国際理解教育を地域で実践していく担い手を育成するプログラムです。人権・開発・環境・平和などのテーマを中心とした国際理解教育の内容と参加型手法を4回のセミナーで学び、その後参加型ワークショップのファシリテーション実践を積み上げていきます。ただのワークショップ体験だけに終わらせず、自分で実践していく場を開拓していく「やる気」のある方を対象としています。

トレーニング・セミナー (全4回)

日時:

第1回 9月27日(土) 10:00-17:00

第2回 10月25日(土) 10:00-17:00

第3回 11月8日(土) 10:00-17:00

第4回 12月13-14日(土日; 合宿研修)

会場: 北区立田端ふれあい館 (第1-3回)
第4回についてはまだ未定

参加費: 3万円+第4回の宿泊費・食費

このセミナーを受けた方には海外での実践の場にアクセス可能です。例年の派遣先はカンボジアの中学校ですが今年度からはバングラデシュからも受け入れ希望が来ています。

「M.E.E.T.ザ・ワールド」プログラムに関するお問い合わせ・お申し込みは田中・川又まで

97' グローバル・セミナー終了

対立の中に対話を ～平和的共存のための対立の解決トレーニング～

6月28-29日のグローバル・セミナーでは全国から69名の参加者を迎え、対立解決トレーニングを通し自己の内面や他者とのかかわりを見つめ直す2日間となりました。アメリカのESR(社会的責任のための教育者の会)よりゼフリン・コンティさんを講師として迎え、一日目は、「対立を色で表わすとしたら」「小さなわかちあい(マイクロ・ラボ)」「対立のエスカレーター」「アクティブ・リスニング」などのアクティビティを通して、対立や、怒りのような感情はごく自然で誰もが経験することであり、大切なのは責任のある行動をもって創造的にそれにどう対処するかであることを繰り返し学びました。2日目は3つの分科会に分かれ、一日目の対立についての「気づき」や概念・手法をふまえグループCAP、コミュニケーションラボ21、ERICがファシリテーターをつとめ、主にロールプレイやドラマという演劇的手法を体験しました。なお、6月30日-7月8日は、横浜YMCAとよなか国際交流協会、新英語教育研究会他、都立竹の台高校、お茶の水附属中・高校、東大附属中・高校の協力でセミナーを行いました。

今回、いじめの解決に対立解決をいかに活かせるかという視点でセミナーに参加された方が多く、米国の学校における「仲間調停」の取り組みは大きな関心をよびました。日本の新聞でも何度か「いじめ予防策」として紹介されていますが、対立解決の取り組みの中で「仲間調停」はいわば上級編であり、現場での実践をめざすならば、まず対立の解決の構造的な理解・トレーニングが必要とされます。またいじめが対立であるか、という議論もあります。ESRの平和教育は、協力・コミュニケーション・多様性の尊重・情感に訴える教育・対立の解決を「平和な教室を実現するモデル」の5つの要素としています。その予防的、創造的な取り組みに学び、いじめ問題に取り組む方々などの協力も得ながら、今後対立解決を日本の教育の中にどう取り入れられるかを模索し実践していければと願います。ご協力下さいました方々、本当にありがとうございました。なお、10月からは勉強会も予定しています。11月には、上記セミナーの記録、補足説明、また平和教育の資料リストなどの情報も盛り込んだ報告書をまとめる予定です。お問い合わせは高橋まで。

ERIC

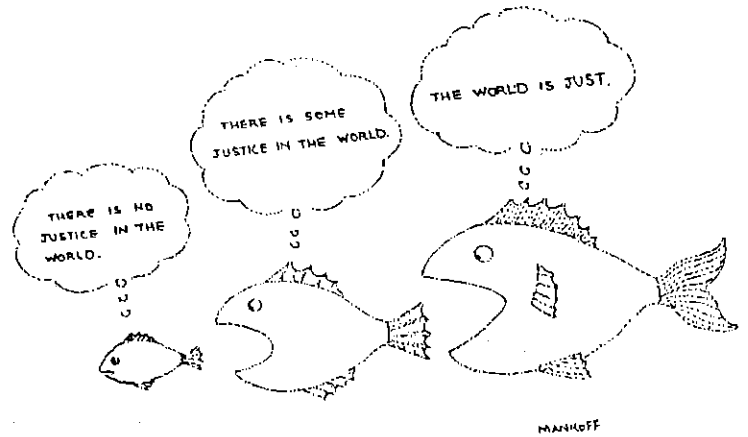
国際理解教育センター
International Education
Resource & Innovation Center
114 東京都北区東田端1-14-1 岩瀬ビル1F
Iwase Bldg. 1F, 1-14-1 Higashi-tebata,
Kita-ku, TOKYO 114 JAPAN
代表案内電話 & FAX: 03-3800-9414

イギリス研修ツアー報告

日本の教員を対象として行われた「第3回Global Education Summer School」への参加と主要な開発教育センターやNGOへの訪問を盛り込んだERICイギリス研修ツアー1997が7/30-8/14に実施された。Centre for Global EducationのMargot BrownさんによるGlobal Education Summer Schoolでは、グローバル教育に関する理論とアクティビティ実践がバランス良く組まれていた内容の濃い8日間プログラムだった。特に現地教員やさまざまな教育実践をしている方々とのセッションや交流の時間では、日本でセミナーでは経験できない貴重な学びが得られたと思う。また、大いに学ぶと同時に、大いに遊ぶことを考慮されたプログラムでもあり、観劇やボートトリップ、ヨークの街探検(Town Trail)などイギリスの文化も堪能できた。

Leeds DEC (リーズ開発教育センター)、Oxfam Education、Council for Education in World Citizenshipを訪問した。各団体の活動やさまざまな教材・資料を紹介してもらい、改めて地元の教員や団体を巻き込んだ活動に感動した。特に地元の教員とワーキング・グループを作り、途上国のNGOから情報協力を得て、開発教育教材を作っているシステムは、是非わたしたちも見習いたい点である。

今回のイギリス研修ツアー1997の簡単な報告書が9月初旬に出来ます。また、Centre for Global EducationによるGlobal Education Summer Schoolは毎年実施されます。興味のある方はERICまでお問い合わせください。



参加者の声

日々感動のツアーを終えた今、体と心のリフレッシュを実感し、充実感に包まれている。

3月、偶然ERICのツアーを知り、Global Educationの何たるかも、さらに英語もnothingの我が身もわきまえず申し込んだ。実際Margot先生の刺激的なワークショップに出会い、参加型学習に感激し、訪問したNGOや開発教育センターでは教材をわんさか買い込み、そしてフリータイムにはHands-onスタイルの博物館めぐりと感性教育の最前線をたどっていた。

新学期には人権や平和をも配慮した環境教育への変身を試みようかとワクワク。そして来年はこの充実感を是非学生たちにも体験させたいと考えている。

松永三姉緒さん(大阪薫英女子短期大学 児童教育学科教授)

グローバル教育

あらゆるレベルでの「相互依存」関係を中心とした概念をもつグローバル教育は、1970年代にアメリカではじめられた。「グローバル教育は、限りある資源のもとで、人種的、文化的に多様でますます相互依存を深めつつあるこの世界で、生きていくために必要な知識・技能・態度を育成することを目的とする」(NCSS, Position Statement on Global Education) イギリスでは、同じような目的を持った「ワールド・スタディーズ」と呼ばれる教育実践が1970年代から活発になる。「ワールド・スタディーズ」は1960年代のグローバル教育の高まりから発展してきた。イギリスのCentre for Global Educationでは、環境・開発・人権・未来・平和・個と社会などの分野を扱う問題の次元、個人・地域・国・世界のさまざまなレベルで考え

ながら人と人・人と場所・場所と場所のつながりを探る空間的次元、現在・過去に学びながら未来的志向を持つ時間的次元、個人の潜在的能力を發展させ、気づきをうながす内面的次元の4つをグローバル教育の枠組としている。

参考

- ・ Margot Brown, 「Global Education Summer School 1997-Coursebook」 Centre for Global Education, UK
- ・ 大津和子「国際理解教育～地球市民を育てる授業と構想」国土社 1992
- ・ 開発教育推進セミナー編「新しい開発教育のすすめ方～地球市民を育てる現場から」古今書院 1995

.....授業実践例.....

「食」と「命」のかかわりををテーマに実践に取り組んでいる小学校の先生から「クロマグロの悲劇」を取り入れた授業記録をお送りいただきました。

実施者 名古屋市立山根小学校 本間雅人先生
対象 同小学校5年1組 (33名)
実施単元 社会科「わたしたちの生活と食料生産 水産業のさかんな地域」(第4・5時限に実施)
単元のねらい

身近な食材を見つめ直すことで、食品が生産され、消費者の手に届くまでの様々な人の営みや問題点に気づき、自分なりの考えがもてること。

◆単元全体の構想案

- 1時限 魚の獲り方を調べよう
- 2時限 水産業の盛んな長崎市
- 3時限 日本の漁場
- 4時限 マグロをどのようにとればいいのか
- 5・7時限 獲る漁業から育てる漁業へ

◆第4時限の展開案

- 1. マグロがどのような魚であるかを知る。
- 2. マグロ獲りゲームを行う。
- 3. 国際漁業会議を開催、各チームでまとめた解決案を発表し、意見を述べ合う。
- 4. 本時の感想をまとめる。
- 5. 再度、マグロ獲りゲームを行う。

◆子どもたちの様子.....

まず、マグロが大型の回遊魚であること、日本のマグロの消費量が世界一であることを知らせたのち(10分)4グループに分かれゲームを行った。

第1回目(35分)

1シーズンで瞬く間にマグロは獲り尽くされた。2シーズン目を始めようと呼びかけると、子どもたちは獲ったマグロを元へ戻そうとした。「獲った分はすでに売ってしまったから、手元がない」ことを説明すると、「全部獲ってはいけなかったんだ」などつぶやいた。マグロを獲り尽くした結果、ゲームが続けられなくなったこと、それが現実社会では資源が枯渇して漁ができなくなることを意味するのだと悟ったようだ。みんなが解決策を考えた結果、「獲る期間を制限するなどして少し残す」「小、中を逃す」「他の海から獲ってくる」「人工養殖をする」などが出た。この時点での感想文は、国際的な視野で考えている子どももいるが、全体的に見ると、毎年魚を食べ

「クロマグロの悲劇」は

魚のような共有物を絶滅させずに持続的に管理するためにはどうすればいいかを自己の感情に即して理解する。また、国際問題にも発展する回遊性魚種の魚法や捕獲の課題や漁業規制をめぐる課題を解決するためには人間の倫理感が必要なことなどを理解するためにERICが開発したシミュレーションゲームです。

◆ゲームの条件

1回のゲームで4シーズン出漁、自由に捕獲する。マグロは最初は大10匹・中50匹・小100匹。シーズンの合間に残っている大1匹から小100匹産まれ、中5匹が大1匹に、小10匹が中1匹に成長する。マグロの価格は大1万円、中千円、小10円。出漁の採算を確保するには、最低3万円の収入が必要。(今回は中100匹・小400匹を用意。)

◆本間先生の感想

海洋資源を枯渇させないため、また毎年安定した漁獲を得るためには繁殖力のあるマグロを残すべきことが頭では分かっている、自分でやってみると、高い収入を得たくて早い者勝ちで高価な魚から獲ってしまう。子どもたちはその現実を体験し、問題解決の難しさを実感したと思う。国際会議として地球規模の考えを重視するには、5年生では少し難しい課題だ。現行の指導要領では、6年生の3月以降の取り扱いが妥当であろうが、子どもの発達段階に応じていろいろ異なる課題に取り組ませることができ、広がりのある学習材だと考える。

- 「参加型で伝える12のものの見方・考え方」(ERIC発行)参照

れるようにしている漁師さんの工夫や努力を想像するものが多かった。

第2回目(20分)

多少遠慮して獲ったが、2シーズン目に全て獲り尽くされた。マグロを獲り続けるための方法を話し合った結果、「量を決めて獲る」「収入の上限の金額を決める」「禁漁区を設定する」などの案が出た。

第3回目(10分)

回りの様子を見て獲りすぎたと思うと、いくらか返すグループがいくつかあった。「大きいのを残せ」など自制を促す発言が多数出た。4シーズン目は残っていた5匹がすぐさまなくなったが、2匹獲ったグループが1匹もどした。これからもマグロを食べ続けようとする考えからだった。なお、漁獲の多いチームはもう1そう船を出してもよいというルールが設けであったが、競争のすさまじさに使わずじまだった。

連続講座

「地球と水と世界の人々、 私たちの暮らし」

水と河川について連続5回で学んでいく講座です。地球の70%を占める水、様々に姿を変える水や河川をめぐる水の面白さ、水利権、水の汚染、水源、水の中や水辺の生態系、絶滅の危機にあるような水辺の生き物や植物について、日本の水分野の途上国支援について連続5回で学んでいきます。

現在、世界の人口のおよそ3分の1が水への供給が十分でないような地域に居住しています。そして、もし何の措置もこのままとられないままだとすると、2025年には地球上の人口のおよそ3分の2、55億人の人々が似たような状況に直面することになるでしょう。1995年には、世界人口のおよそ20%の人々が、安全な飲み水へのアクセスがありませんでした。そしておよそ50%の人々が適切な衛生が整っていない状況にあります。

また、世界保健機関は、飲み水が安全でないことと衛生の欠如によって引き起こされる病気により毎年およそ500万人以上の人々が死亡していると報告しています。途上国の人口のおよそ半分は、直接には伝染、間接的には病原体の保持している生物などが原因となって引き起こされる水に関連している病気によって苦しんでいます。

- Comprehensive Assessment of the Freshwater Resource of the World --summary
Mr. Johan Kuylenstierna, Department for Policy Coordination and Sustainable Development(DPCSD)
- Overall Progress Achieved since The United Nations Conference on Environment and Development, Report of the Secretary-General, E/CN.17/1997/2

お知らせ

- ERIC通信を読者の皆様のアイデア交換の場にして行きませんか。今回の授業実践例紹介についてのご意見をお寄せください。
- 今年もERICは、「国際協力フェスティバル」に参加します。当日手伝っていただけるボランティアさんを募集しています(交通費支給)。興味を持たれて、ご都合のよろしい方は担当の木野か高橋までご連絡下さい。お待ちしております!日時:10月4(土)、5日(日) 10時から17時まで 日比谷公園
- ERIC資料室利用案内
ERIC資料室では、海外教材900冊の他、日本語資料、団体資料などもご活用いただけます。閲覧日:月曜日~金曜日(水、土、日・祝日はお休みです) 時間:午後1時~6時 利用料:500円 ★必ず事前連絡の上お越し下さい。

ERIC

書籍購入費・研修参加費用は下記のそれぞれの講座に振込願います

書籍専用 郵便振替口座 00160-3-547794 ERIC
研修参加費専用 郵便振替口座 00180-5-710744 ERIC事務局
ERIC通信No.8号 年4回発行 印刷 (株) TRY
国際理解教育センター; ERIC 114 北区東田端1-14-1岩瀬ビル

第1回9月6日(土) 6:00~8:30「地球は水球」

Part1 水の循環~変化する水の姿
Part2 スーダン/トーカルデルタの人々の暮らし
講師 堀 信行(東京都立大学理学研究科)
会場:文京区シビックセンター4階
(地下鉄丸の内線「後楽園」駅下車徒歩3分)

第2回10月25日(土) 3:00~5:00「河川開発と水利用」

Part1 日本の河川開発
Part2 国連と水分野の取り組み
講師 大熊 孝(新潟大学工学部)
斎藤 博康((株)日水コン海外本部)
会場:環境パートナーシップオフィス会議室
(地下鉄半蔵門線「表参道」駅下車徒歩8分)

第3回11月22日(土) 3:00~5:00「水汚染とわたしたちの暮らし」

Part1 水質~先進国都市での課題とカンボジアの水事情
Part2 東京都の水と暮らし
講師 高橋 敬雄(新潟大学工学部)
上原 公子(東京の水を考える会)
会場:神田バンセ2階会議室
(JR線「水道橋」駅徒歩10分)

第4回12月13日(土) 3:00~5:00「水辺の生きもの」

Part1 水辺の生き物と生態系
Part2 水辺の植物~絶滅に瀕している水草
講師 安東 正行(埼玉県生態系保護協会)
佐野 郷美(千葉県市川市西高等学校生物)
会場:神田バンセ2階会議室
(JR線「水道橋」駅徒歩10分)

第5回1月(土) 日程未定3:00~5:00「世界の人々と水と開発援助」

ISD「21世紀に向けた環境開発支援構想」
の環境ODAへの取り組み
講師 外務省経済協力局調査計画課 他

- ◆ 参加費・資料代 各講座2,000円
(受付は講座開始の30分前からです)